

日本文学名著
日汉对照系列丛书

蒲团 棉被

■日本第一部自然主义文学
代表作品，一部「赤裸裸的、
大胆的个人肉欲的忏悔录」。
主人公小说家竹中对年轻的
美女弟子陷入单相思，但对
方另有所爱。小说家最终把
头埋在芳子的棉被中嗅其体
香，痛哭失声……。

田山花袋

著

许昌福

译



吉林
大学
出版社

日本文学名著
日汉对照系列丛书

蒲团

棉被

■日本第一部自然主义文学
代表作品，一部赤裸裸的、
大胆的令人肉欲的忏悔录。
主人公小坂宗平对年轻的
美女弟子陷入爱河，但母
方另有所爱。小说最终以犯
天理在芳子的棉被中咬其伴
音、溺死其妻……

田山花袋 著 许昌福 译

吉林大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

棉被 / (日) 田山花袋著; 许昌福译. — 长春: 吉林大学出版社, 2009. 1

(日本文学名著日汉对照系列丛书)

ISBN 978-7-5601-4031-5

I. 棉… II. ①田…②许… III. ①日语-汉语-对照读物②中篇小说-作品集-日本-近现代 IV. H369. 4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2008)第201932号

日本文学名著日汉对照系列丛书

棉 被

-
- | | |
|---------|--|
| ◎作者 | 田山花袋 |
| ◎译 | 许昌福 |
| ◎责任编辑 | 刘冠宏 |
| ◎责任校对 | 刘冠宏 |
| ◎封面设计 | 张沐沉 |
| ◎版式设计 | 林 宁 王阿娜 张 鑫 孙明晓
王 鑫 贾 萍 李 雪 王 汐 |
| ◎出版发行 | 吉林大学出版社 |
| ◎社址 | 长春市明德路421号 |
| ◎邮编 | 130021 |
| ◎发行部电话 | 0431-88499826 |
| ◎网址 | http://www.jlup.com.cn |
| ◎E-mail | jlup@mail.jlu.edu.cn |
| ◎印刷 | 长春市华艺印刷有限公司 |

版权所有 翻印必究

150mm × 230mm 16开 4.5印张 104千字

2009年01月第1版 2009年01月第1次印刷

ISBN 978-7-5601-4031-5

定价: 15.00 元

出版前言

语言是为交流而生的。原始的人们，必是由于郁郁乎有感于心，岌岌乎有危及身，手舞之足蹈之而不达其意，便佐之以喉舌了。至于那有感于心的是爱是恨，有危及身的是兽是敌，我辈几万年后恐怕难以妄加猜测。总之，咿呀呼喝，渐成定式。以警以劝，极得其便；以歌以咏，曲尽其情。这便是今人所说的语言了。

而就古人的交流范围而言，不过是一个部族。因此，语言自诞生之初便是因部族而异的。至今，中国的少数民族地区仍然存在着隔山不同语过河非乡音的情形。此后，私财积，政权生，征伐起，海内一。于是，王权下的语言在不同部族间渐渐统一融合，语言的差异便主要体现在国家之间了。由于语言的不解，异邦之间感觉神秘，出现误会，甚至由无知而仇视。

解除外国人在本土人眼里的神秘、误解，当然需要交流。学语言，是交流所需。而学语言的过程本身，也是交流。最简单的问候语，往往是一国风土人情的缩影；名家的小说文章，则是欣赏美文和解读社会的阶梯。

日本与中国不过一苇可航之遥，文化交流源远流长。吉林大学是中国名校，日语教育素建伟勋。此次由吉林大学出版社组织出版的日本名著日汉对照系列丛书，既立意于促进日语学习，又便于大众欣赏日本名家美文，其意义深远。

本丛书选译了田山花袋的《棉被》，泉镜花的《高野圣僧》、《歌行灯》，樋口一叶的《浊流》、《十三夜》、《青梅竹马》，岛崎藤村的《破戒》，森鷗外的《舞女》、《山椒

大夫》、《高濂舟》，夏目漱石的《我是猫》、《少爷》，芥川龙之介的《罗生门》、《鼻子》、《山芋粥》、《蜘蛛丝》、《地狱图》、《河童》，梶井基次郎的《柠檬》、《有城楼的市镇》、《冬天》、《冬天的苍蝇》、《崖上的情绪》，横光利一的《蝇》、《太阳》、《头与腹》，堀辰雄的《起风》，川端康成的《伊豆舞女》、《雪国》，大江健三郎的《万延元年的足球》等，都是日本自明治到现代有代表性的作家作品。

这些作家作品在创作思想上移风易俗，在表现技法上不乏创新。因而，有的语言表述悖于常规，有的用词艰涩语意叠积，有的意境微妙难以言传，给对译工作增加了不少难度。译者虽尽心努力，但水平所限，译文难免有不妥之处，还望读者指正。

吉林大学出版社

2008年10月

序 言

田山花袋（1871—1930），本名录马尔，日本明治时期自然主义代表作家，代表作有《棉被》（『蒲団』，1907年）、《乡村教师》（『田舎教師』，1909年）等。

《棉被》发表于1907年，对日本文学产生巨大影响，是确立日本自然主义文学发展方向的作品。田山本人也因此而被承认为日本自然主义文学的先驱。小说既无跌宕起伏故事情节，也无美辞丽句的堆砌，而只有娓娓吐露的作者的情感世界和内心矛盾，被称为是一部“赤裸裸的、大胆的个人肉欲的忏悔录”。据田山在《东京三十年》中的自述，当时为应付《新小说》约稿，犹豫万端，终以其弟子芳子为原型进行创作，心中深感不安云云。

小说家竹中时雄为生活所迫在书籍公司从事地理书的编写工作。三年前，当妻子怀上第三个孩子的时候，一位叫做芳子的女性从冈山县来信，请求作为弟子学写小说。小说家最初拒绝了，但看她一片热诚，也就同意了。于是，年轻的美女弟子来到东京。小说家让芳子住在妻子姐姐家里，很快陷入单相思，甚至想到抛妻弃子。但是，芳子另有所爱。小说家虽然成功扮演了文学前辈的角色，但在人际关系上却是完全低能。最终，竹中把头埋在芳子的棉被中嗅其体香，痛哭失声。这些平铺直叙的描写，给世人和文学评论家带来极大冲击。

但是，从语言风格来看，小说整体上比较朴实、平淡，译者也尽可能保持了原著的这一语言风貌。又由于对译读物的特殊性，在段落、词句顺序上努力与原著保持了一致，但在一些

记述上与汉语习惯不同之处，如应加引号的地方，也进行了适当的处理。此外，译者将书中最后部分的“夜着”一词，译为“睡袍式棉被”，是因为原著中的“夜着”不是一般的棉被，而是带有宽大袖子和领口的棉被，“天鷲絨の襟に顔を埋めて”中的“襟”指的正是天鹅绒领口。

由于时间和水平所限，译文不足之处在所难免，敬请读者批评指正。

译者

2008年10月于长春

目录 | 棉被



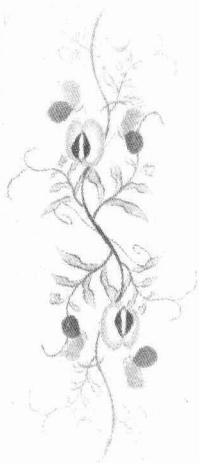
一.....	2
二.....	10
三.....	20
四.....	34
五.....	58
六.....	70
七.....	88
八.....	96
九.....	116
十.....	124
十一.....	134

小石川の切支丹坂きりしたんざかから極楽水ごくらくすいに出る道のだらだら坂を下りようとして渠かれは考えた。「これで自分と彼女との関係は一段落を告げた。三十六にもなって、子供も三人あって、あんなことを考えたかと思うと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本当にこれが事実だろうか。あれだけの愛情を自身に注いだのは単に愛情としてのみで、恋ではなかったろうか」

数多い感情ずくめの手紙——二人の関係はどうしても尋常ではなかった。妻があり、子があり、世間があり、師弟の関係があればこそ敢てあえ烈しい恋はげに落ちなかったが、語り合う胸とどろきの轟、相見眼の光、その底には確かに凄じすさまい暴風あらしが潜んでいたのである。機会でつくわに遭遇しさえすれば、その底の底の暴風は忽ち勢たちまを得て、妻子も世間も道徳も師弟の関係も一挙にして破れて了うであろうと思われた。少くとも男はそう信じていた。それであるのに、二三日来のこの出来事、これから考えると、女は確かにその感情を偽り売ったのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思った。けれど文学者だけに、この男は自ら自分の心理を客観するだけの余裕を有っていた。年若い女の心理は容易に判断し得られるものではない、かの温あたたかい嬉うれしい愛情は、単に女性特有の自然の発展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度も都すべて無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種なぐさみの慰藉を与えたようなものかも知れない。一步を譲って女は自分を愛して恋していたとしても、自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意識いかんの加わるのを如何ともすることは出来まい。いや、更に一步を進めて、あの熱烈なる一封の手紙、陰に

就要走下小石川切支丹坂通往极乐水的缓坡时，他心想：“这样一来，我和她的关系就算告一段落了。三十六岁的年纪，还有三个子女，竟然还动过那种念头，想起来自己都觉得荒唐。可是……，可是……，这真是事实吗？她向我倾注那么多的爱，难道只是爱慕而非恋情？”

从大量充满情感的书信来看，两人的关系非同寻常。尽管由于有妻室、子女、世俗观念以及师生关系的束缚才未坠入炽热的恋情之中，但是交谈时的内心悸动，对视时的闪烁目光中分明潜藏着猛烈的暴风。只要遇到机会，深藏在心底里的这股暴风就会骤然刮起，一举冲破妻儿亲情、世俗观念、道德标准以及师生关系的束缚。至少，他对此深信不疑。不过，从这两三天所发生的这件事来看，女子确实是在卖弄虚情。他总觉得那女子欺骗了自己。不过，他毕竟是文学家，可以从容地客观审视自己的心理。判断一个年轻女子的心态并非易事，也许那种温柔而愉悦的爱，只是女性特有的自然禀性，看似美丽的眼神、貌似温柔的态度都是无意识的，无意义的，就如同自然之花给予观赏者一种慰藉一样。退一步想，即使她对自己真有爱恋之心，又能如何呢？自己是老师，她是女弟子；自己是有妻小之身，而她是妙龄花朵，无奈相互间的这种差距意识只会不断递增。不，如果进一步想，在那封充满热情的信件里，她明里暗里述说着



陽にその胸の悶を訴えて、丁度自然の力がこの身を圧迫するかの
 ように、最後の情を伝えて来た時、その謎をこの身が解いて遣ら
 なかった。女性のつつましやかな性として、その上に猶露わに迫
 って来ることがどうして出来よう。そういう心理からかの女は失
 望して、今回のような事を起したのかも知れぬ。

「とにかく時機は過ぎ去った。かの女は既に他人の所有だ！」

歩きながら渠はこう絶叫して頭髪をむしった。

縞セルの背広に、麦稈帽、藤蔓の杖をつけて、やや前のめりにだ
 らだらと坂を下りて行く。時は九月の中旬、残暑はまだ堪え難く暑
 いが、空には既に清涼の秋気が充ち渡って、深い碧の色が際立って
 人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雑貨店、その向うに寺の門やら
 裏店の長屋やらが連って、久堅町の低い地には数多の工場の煙筒が
 黒い煙を漲らしていた。

その数多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それが渠の毎日 |
 正午から通う処で、十畳敷ほどの広さの室で中央には、大きい一脚
 の卓が据えてあって、傍に高い西洋風の本箱、この中には総て種々
 の地理書が一杯入れられてある。渠はある書籍会社の嘱託を受けて
 地理書の編輯の手伝に従っているのである。文学者に地理書の編
 輯！渠は自分が地理の趣味を有っているからと称して進んでこれに
 従事しているが、内心これに甘じておらぬことは言うまでもない。
 後れ勝なる文学上の閱歴、断篇のみを作って未だに全力の試みをする
 機会に遭遇せぬ煩悶、青年雑誌から月毎に受ける罵評の苦痛、渠
 自らはその他日成すあるべきを意識してはいるものの、中心これを
 苦に病まぬ訳には行かなかつた。社会は日増に進歩する。電車は東
 京市の交通を一変させた。女学生は勢力になって、もう自分が恋を
 した頃のような旧式の娘は見たくも見られなくなった。青年はまた
 青年で、恋を説くにも、文学を談ずるにも、政治を語るにも、その

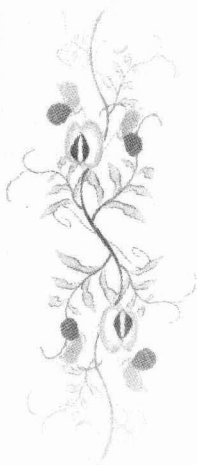
心中的苦闷，宛如自然之力迫使她把最后的情感传递过来，而此时自己却没有给她解开这个心中的迷。出于女性拘谨的本性，她怎能比这更直露地向我表白内心情感呢？也许正是出于这种心理，她才对我感到失望，才促使这件事的发生。

“反正时机已错过，她已经是别人的人了！”

他边走边大声喊，并扯着自己的头发。

他身穿条纹哔叽西装，头戴平顶麦秆帽，拄着一根藤杖，身子微微前倾，慢悠悠地走下坡去。时值九月中旬，虽然秋日余暑难耐，但天空却已充满了清凉的秋意，碧蓝的天色格外令人动情。街道的一边排列着鱼铺、酒馆、杂货店，其对面是一座寺庙的正门以及一排排简陋的房屋，而久坚町的低洼地带，许多工厂的烟囱正吐着黑烟。

在众多工厂中，有一幢西洋风格的楼房，位于二楼的一个房间就是他每天午后要来的地方。在有十张榻榻米大小的房间中央，摆放着一张大大的写字台，旁边立着高高的洋式书柜，里面摆满了各种各样的地理书籍。他受一家出版社的委托，正在帮助编辑地理书。让文学家编地理书！尽管他自称由于对地理感兴趣，才主动承担这项工作的，但自不待言，其实他内心里并不情愿。过时的文学创作经历，只写过短篇而至今没有机会一展全部实力的烦闷，每月都受青年杂志酷评的痛苦，凡此种种，尽管他自认为以后会成功，但内心里不可能不对此感到苦闷。社会日益进步，电车使东京市的交通为之一变。女学生也形成一股势力，过去自己谈恋爱时的那种旧式女性已无处可寻了。青年们更是如此，无论是谈情说爱、讨论文学



態度が総て一変して、自分等とは永久に相触れることが出来ないように感じられた。

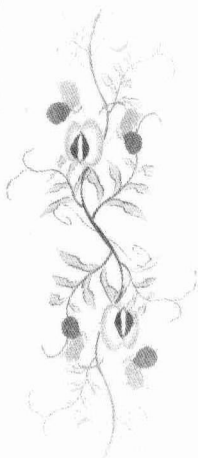
で、毎日機械のように同じ道を通って、同じ大きい門を入れて、輪転機関いえ うごかの屋を撼す音と職工の臭い汗との交った細い間を通って、事務室の人々に軽く挨拶あいさつして、こつこつと長い狭い階梯はしごを登って、さてその室に入るのだが、東と南に明いたこの室は、午後の烈しい日影を受けて、実に堪え難く暑い。それに小僧が無精そうじで掃除をせぬので、卓の上には白い埃ほこりがざらざらと心地悪い。渠は椅子に腰を掛けて、煙草たばこを一服吸って、立上って、厚い統計書と地図と案内記と地理書とを本箱から出して、さて静かに昨日の続きの筆を執り始めた。けれど二三日来、頭脳あたまがむしゃくしゃしているので、筆が容易に進まない。一行書いては筆を留めてその事を思う。また一行書く、また留める、又書いてはまた留めるといふ風。そしてその間に頭脳に浮んで来る考は総て断片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分子が多い。ふとどういふ聯想れんそうか、ハウプトマンの「寂しき人々」を思い出した。こうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教えて遣ろうかと思つたことがあつた。ヨハンネス・フォケラートの心事と悲哀とを教えて遣りたかつた。この戯曲を渠が読んだのは今から三年以前、まだかの女のこの世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、その頃から渠は淋さびしい人であつた。敢てヨハンネスにその身を比そうとは為しなかつたが、アンナのような女がもしあつたなら、そういう悲劇トラジディに陥るのは当然だとしみじみ同情した。今はそのヨハンネスにさえなれぬ身だと思つて長嘆した。

さすがに「寂しき人々」をかの女に教えなかつたが、ツルゲネーフの「ファースト」といふ短篇を教えたことがあつた。洋燈ランプの光あきら明かなる四畳半の書斎、かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い深い意味を以て輝きわたつた。ハ

还是谈论政治，其态度也发生了极大变化，他感到自己永远也不可能与他们沟通了。

他每天像机器一样，走同一条路，进同一扇大门，穿过交杂着震撼印刷机房的轰鸣声和工人汗臭味儿的狭窄通道，与办公室里的人打过招呼，一步步爬上狭长的楼梯，这才走进自己工作间。这间屋子的东面和南面都是窗户，每当下午烈日照射进来，实在是酷热难耐。再加上小伙计很懒，不经常打扫屋子，桌子上落了一层灰，摸上去粗粗拉拉的，感到很不舒服。他坐到椅子上抽完一支烟，便站起身来从书柜里抽出厚厚的统计册以及地图、旅行指南、地理书等，拿起笔接着昨天的部分静静地写了起来。可是，由于这两三天头脑烦乱，所以进展缓慢。常常是写一行便停下笔想那件事，写一行，停一停，再写一行，再停一停。而且，此时头脑中浮现出的思绪往往是片段性的、猛烈的、急促的、绝望的。不知缘于何种联想，他忽然想起了豪普特曼的《孤独的人》。事情还未发生时，他曾想每天给她讲一段这部戏剧的片段，把约翰内斯福克拉特的心事和悲哀讲给她听。他读这部戏剧是在三年前，那时他做梦也没想到世上还有她这样一个女子，不过那时他已经开始感到寂寞了。虽然当时并没有把自己与约翰内斯相比，但深深同情约翰内斯的处境，觉得若果真有安娜那样的女人，陷入那样的悲剧也是理所当然的。想到自己如今连约翰内斯都当不成了，不由得发出一声长叹。

《孤独的人》终究没有教成，但给她讲过屠格涅夫的短篇小说《浮士德》。洋灯照亮着四张半榻榻米的书斋，她年轻的心里充满了对多彩爱情故事的向往，富有情感的双眸饱含深意闪闪发亮。时髦的庇



イカラな庇髪、櫛、リボン、洋燈の光線がその半身を照して、一巻の書籍に顔を近く寄せると、言うに言われぬ香水のかおり、肉のかおり、女のかおり——書中の主人公が昔の恋人に「ファースト」を読んで聞かせる段を講釈する時には男の声も烈しく戦えた。

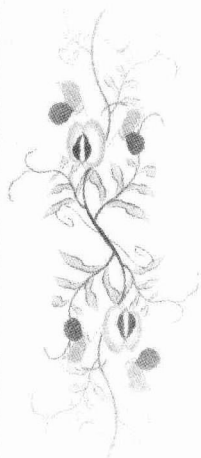
「けれど、もう駄目だ！」

と、渠は再び頭髪をむしった。

发、簪栉、发带，灯光映照着她的侧影。每当她把脸凑过来同读一本书时，就能闻到一股难以形容的香水味和女人的体香。每当讲到书中的主人公给过去的恋人读《浮士德》的那一段时，他的声音便猛烈地颤抖起来。

“可是，一切都无济于事了。”

说着，他又一次扯起了自己的头发。



渠は名を竹中時雄と謂った。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出来て、新婚の快樂などはとうに覺め尽した頃であった。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作ライフワークに力を尽す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に帰って来て、同じように細君の顔を見て、飯を食って眠るという單調なる生活につくづく倦き果てて了しまった。家を引越歩いても面白くない、友人と語り合っても面白くない、外国小説を読み涉あさ猟しても満足が出来ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の点滴てんてき、花の開落などという自然の状態さえ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるような気がして、身を置くに処は無いほど淋しかった。道を歩いて常に見る若い美しい女、出来るならば新しい恋を為たいと痛切に思った。

三十四五、實際この頃には誰にでもある煩悶はんもんで、この年頃に賤しい女に戯るるもの多ひつきよういのも、畢竟その淋しさを医す為めである。世間に妻を離縁するものもこの年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝 | 邂逅であう美しい女教師があつた。渠はその頃この女に逢うのをその日その日の唯一の樂みとして、その女に就いていろいろな空想たくましゆを逞たくまうした。恋が成立って、神樂坂あたりの小待合に連れて行って、人目を忍んで楽しんだらどう……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したらどう……。いや、それどころではない、その時、細君が懷妊しておつたから、不図難産して死ぬ、その後その女を入れるとしてどうであろう。……平気で後妻に入れることが出来るだろうかどうかなどと考えて歩いた。